



奥小山8号墳発掘調査報告書

平成10年度

倉吉市教育委員会

10.2
cur
01)

序

この報告書は、主要地方道鳥取鹿野倉吉線道路改良工事に伴う事前調査として、鳥取県倉吉土木事務所の委託を受け、平成10年度に、倉吉市上余戸字奥小山、虹ヶ丘町、大原字郡山において実施した発掘調査の記録です。

今回の発掘調査により、5世紀の終わりに造られた円墳を検出しました。古墳の保存状態は非常に良好で、主体部3基、周溝内埋葬施設3基を検出しました。なかでも、中心主体部である3号主体部は、割竹形木棺墓で、棺内外には鉄刀・鉄剣・鉄槍・鐵鎌など多量の鉄器が副葬されていました。

この報告書が、多くの方々に活用され郷土の歴史解明の一助となれば幸いに存じます。

最後に、調査に際してご理解とご協力いただきました鳥取県倉吉土木事務所ならびに地元の方々をはじめ、関係各機関および各位に對し、心から謝意を表する次第であります。

平成11年3月

倉吉市教育委員会

教育長 足羽一昭

<10>0100572486

例　　言

1 本報告書は主要地方道鳥取鹿野倉吉線道路改良工事に伴い、平成10年度に倉吉市教育委員会が倉吉市上余戸字奥小山587-121、虹ヶ丘町244、大原字郡山1247-1で実施した発掘調査の記録である。

2 発掘調査団は次のような組織・編成である。

団　　長　足羽　一昭（倉吉市教育委員会教育長）

調査委員　名越　勉（倉吉市文化財保護審議会会長）

調査員　根鈴　輝雄（倉吉博物館主任学芸員）　　眞田　廣幸（文化課課長補佐兼文化財係係長）

　　　森下　哲哉（文化財係主任）　　根鈴智津子（文化財係主事）

　　　加藤　誠司（文化財係主事）　　岡本　智則（文化財係主事）

　　　岡平　拓也（文化財係主事）

調査補助員　山根　雅美・松田　恵子

事務局　新田　征男（教育次長　6月まで）　　波田野頌二郎（教育次長　7月から）

　　　山脇　将暉（教育次長兼文化課課長）　　山崎慎之介（文化財係主事　6月まで）

　　　藤井　敬子（文化財係主任　7月から）　　福澤　昌子（文化財係主事）

　　　金田　朋子（臨時職員）

内務整理　泉　美智子・世浪由美子・妻藤　君江・松嶋あつ子・竹歳　暁子・山本　錦

3 現場での調査は岡本が担当し、加藤が補佐した。遺構の図面整理は岡本・松田が担当した。遺物実測は岡本・岡平が担当した。遺物写真は岡本が担当し、加藤・松嶋・竹歳・山本が補佐した。浄書は泉・世浪・妻藤が担当した。

4 本書の執筆は岡本が担当した。編集は岡本・松田・世浪が担当した。

5 第IV章は、鑑定の分析結果について、岡山理科大学自然科学研究所　白石　純氏にご寄稿いただいたものである。

6 予備調査において検出した資料も本報告書に掲載した。

7 第1図（地形図）は、建設省国土地理院発行の1：50,000地形図「倉吉」の一部を複製・加筆したものである。第2図は、平成9年修正測量の1：2,500国土基本図　倉吉市平面図を使用した。

8 挿図中の方位は、特に注記を行わない限り国土座標第V座標系の北を示す。

9 遺物に付した記号・番号は、本文・挿図・図版で統一している。

10 調査によって得られた資料は、倉吉博物館に保管している。

本文目次

| | | |
|-------|-----------|----|
| I | 発掘調査に至る経過 | 1 |
| II | 位置と歴史的環境 | 1 |
| III | 調査の概要 | 4 |
| 1 | 遺構 | 4 |
| 2 | 遺物 | 13 |
| IV | 鑑定 | 20 |
| V | まとめ | 22 |
| 報告書抄録 | | |

挿図目次

| | | |
|------|---------------------|----|
| 第1図 | 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図 | 3 |
| 第2図 | 奥小山8号墳調査区位置図 | 4 |
| 第3図 | 調査前地形測量図 | 5 |
| 第4図 | 奥小山8号墳遺構全体図 | 6 |
| 第5図 | 墳丘断面図 | 7 |
| 第6図 | 1号・2号主体部遺構図 | 9 |
| 第7図 | 3号主体部遺構図 | 10 |
| 第8図 | 1号・3号埋葬施設遺構図 | 11 |
| 第9図 | 2号埋葬施設遺構図・周辺出土遺物状況図 | 12 |
| 第10図 | 1号土壤遺構図 | 13 |
| 第11図 | 土器1 | 14 |
| 第12図 | 土器2 | 15 |
| 第13図 | 鉄刀・鉄劍・鉄槍 | 18 |
| 第14図 | 鉄鎌 | 19 |
| 第15図 | 小玉・石製品 | 20 |
| 第16図 | 3号主体部床面出土赤色物質のX線回折図 | 21 |
| 第17図 | 奥小山古墳群周辺地形図・垂飾品・石庖丁 | 22 |

図版目次

| | | |
|-----|-----------------------------------------------------------------------------------|--|
| 図版1 | 遺跡 調査区遠景 調査前全景 調査後全景 | |
| 図版2 | 遺構 1号・2号主体部検出状況 1号・2号主体部 3号主体部検出状況 3号主体部棺内・外遺物 出土状況 3号主体部木棺痕跡検出状況 3号主体部・1号土壤完掘 | |
| 図版3 | 遺構 3号主体部 3号主体部西側断面 3号主体部東側断面 3号主体部棺中央付近南北断面 3号 主体部東小口板痕跡検出状況 | |

図版4 遺構 1号埋葬施設 3号埋葬施設 2号埋葬施設埋土除去 2号埋葬施設土器棺蓋除去 2号埋葬施設土器棺取り上げ後 周溝内土器出土状況 2号埋葬施設検出状況

図版5 遺物 土器

図版6 遺物 鉄製品・玉製品・石製品

I 発掘調査に至る経過

平成9年度に鳥取県倉吉土木事務所から、主要地方道鳥取鹿野倉吉線道路改良工事の計画が提示された。開発予定地の所在する丘陵付近は、昭和55年（1980）に西郷ニュータウン（現在の虹ヶ丘町）造成工事が行われ、これに伴って倉吉市教育委員会が主体となって7基の古墳を調査している。^{註1)}また、踏査によって、天神川沿いに延びる尾根上に中世の山城をはじめ古墳が複数基確認されている。開発予定地内にも、墳丘状の高まりを確認した。このため、予備調査を平成9年（1997）7月3日～7月18日まで倉吉市教育委員会が実施した。^{註2)}この結果、古墳の周溝、土師器などの遺物を検出して、遺跡の存在が明らかになった。倉吉市教育委員会は、鳥取県倉吉土木事務所と協議を図った結果、やむを得ず掘削される尾根先端部分の290m²について発掘調査を実施することとなった。調査は、倉吉市教育委員会が主体となり、平成10年（1998）8月3日～10月19日まで実施した。

註

1 水野正好・丹羽佑一 「奥小山古墳群」（現地説明会資料） 倉吉市教育委員会 1980年

2 関平拓也 「4 虹ヶ丘町地区（奥小山8号墳）」「倉吉市内遺跡発掘調査報告書X」 倉吉市教育委員会 1999年

II 位置と歴史的環境

奥小山8号墳は、倉吉市街地から東方へ約2km離れた、倉吉市上余戸字奥小山587-121、虹ヶ丘町244、大原字郡山1247-1にまたがって所在する。昭和55年、西郷ニュータウン（現在の虹ヶ丘町）の造成工事に伴い7基の古墳が調査されている。造成前の地形は、南東から北西方向に延びる丘陵が、天神川の支流である竹田川と接して北に折れ曲がり、さらに大小6つの丘陵が北に派生する。奥小山古墳群（124）は、このうち中央の3つの丘陵にⅢ群に分かれて存在する。古墳は、6世紀代に造営された円墳群で、埋葬主体は全て木棺墓であった。奥小山8号墳は、Ⅱ群の存在した丘陵の最高所（標高約73m付近）に位置する。北に広がる水田面との比高差は約50mである。

倉吉平野の東端は未開発の丘陵部分が多く、倉吉市中央部、西郊と比較すると周知の遺跡の数は少なかったが、近年現地踏査の進捗により遺跡数が増加した。以下、分布図（第1図）範囲内の遺跡を中心に概要を述べる。

旧石器時代の遺跡は少ない。中尾遺跡（85）・長谷遺跡（54）ではナイフ形石器、上神51号墳（13）・高鼻2号墳の調査中に細石刃石核が出土している。その他、横谷遺跡群でナイフ形石器・楔形石器、藤井谷地区予備調査でナイフ形石器を確認したのみで遺構については未確認である。

縄文時代の遺跡は、主なもので20箇所余りが確認されている。住居址は、取木遺跡で2棟、津田峰遺跡で1棟確認している。松ヶ坪遺跡（116）は配石遺構と土器墓を確認している。その他多くの遺跡は、土器の散布や出土、落し穴を確認したものである。

弥生時代は、大山の火山活動により形成された、倉吉市西郊の久米ヶ原丘陵を中心として集落跡が存在する。その多くは弥生時代後期の集落で、古墳時代にも引き続き営まれる。主なものとして、後中尾遺跡、中峯遺跡、夏谷遺跡（63）、遠藤谷峯遺跡、白市遺跡、沢ベリ遺跡（82・83）などがある。墳墓は、イキス遺跡（74）、向山古墳群ノ峰支群（50）、阿弥大寺四隅突出型埴丘墓群、山根（藤和）四隅突出型埴丘墓（46）、棚ヶ谷埴丘墓（126）などがある。終末期から古墳時代初頭にかけては、土器墓群から古墳へと変遷していく過程がうかがえる二タ子塚遺跡、中峰古墳群（65）がある。

古墳時代前期の首長墓は、粘土櫛を主体部とし、菱鳳鏡・三角縁神獸鏡・二神二獸鏡、多量の鉄器が出土した国分寺古墳（93・前方後方墳？・全長60m）、竪穴式石槨を主体部とする宮ノ峰19号墳・21号墳を初現とする。次に、東郷湖周辺に馬ノ山2号墳（前方後円墳・全長68m）・4号墳（前方後円墳・全長100m）、宮内孤塚古墳（前方後円墳・全長95m）が築造される。馬ノ山4号墳は長大な竪穴式石槨を主体部とし、舶載の三角縁神獸鏡等豊富な遺物が出土している。5世紀代には、山陰地方で最大規模をもち、銘文のある舶載の龍虎文鏡が出土した東郷町・北山古墳（前方後円墳・全長110m）、仿製の三角縁神獸鏡と変形六獸鏡、碧玉製鍬形石、滑石製琴柱形石製品等が出土した上神大将塚古墳（69・円墳・直径22m）が築造される。その他に4世紀末から5世紀にかけての方墳を主体とした猫山古墳群（70）、養水古墳群（58）、5世紀後半から6世紀始めまで連続して築造され1号墳は割竹形木棺墓を埋葬主体とするイザ原古墳群（81）、帆立貝式古墳が群集し墓道が復元できた沢ベリ遺跡（83）、高畠古墳群（111）、立道東古墳群がある。

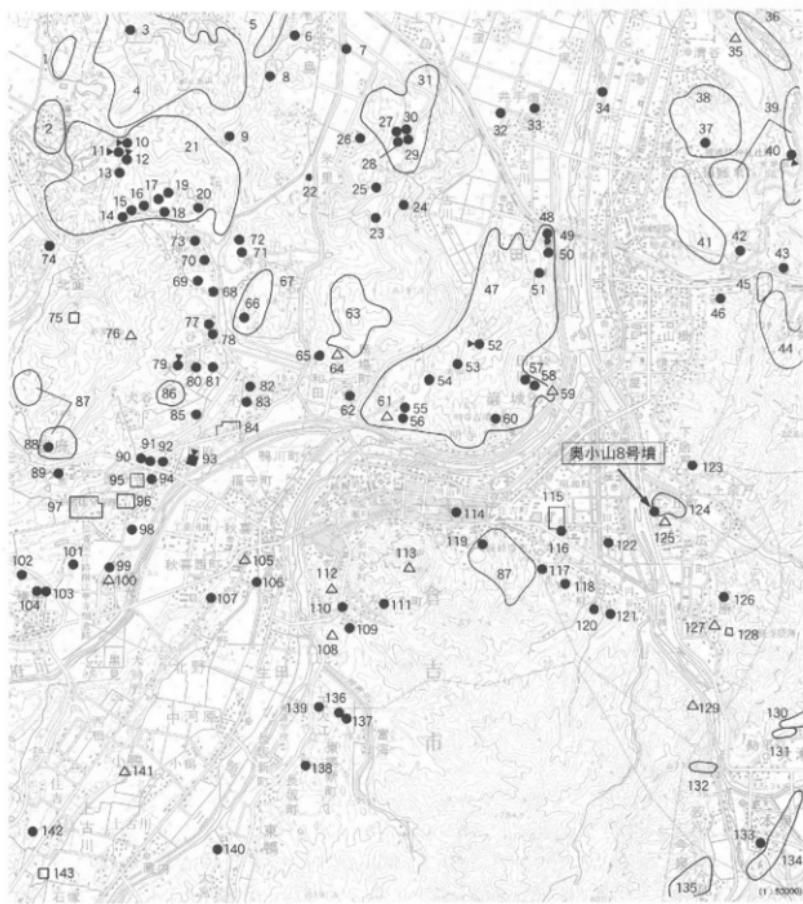
古墳時代後期には、向山、大平山、上神地区周辺などの丘陵に群集墳が多く造られる。向山古墳群（47）は倉吉市街地の北側に存在し、500基以上の古墳が密集する。主なものに向山6号墳（52・前方後円墳・全長40m）、三明寺古墳（60・円墳？・直径18m・国史跡）があり、いずれも横穴式石室を主体部とする。波波伎神社境内にある福庭古墳（37・方墳・一边35m）は切石を使用した横穴式石室を主体部とする。

奈良時代の官衙跡としては、物資収納施設とみられる大型掘立柱建物群を確認した不入岡遺跡（84）、伯耆国衙跡（97）がある。

寺院跡は、正倉院宝物に似た佐波理匙が出土した大御堂廃寺（115・7世紀中ごろ）、大原廃寺（128・7世紀後半）がある。8世紀の中ごろには伯耆国分寺（96）、国分尼寺（法華寺畠遺跡）（95）が近接して設けられる。

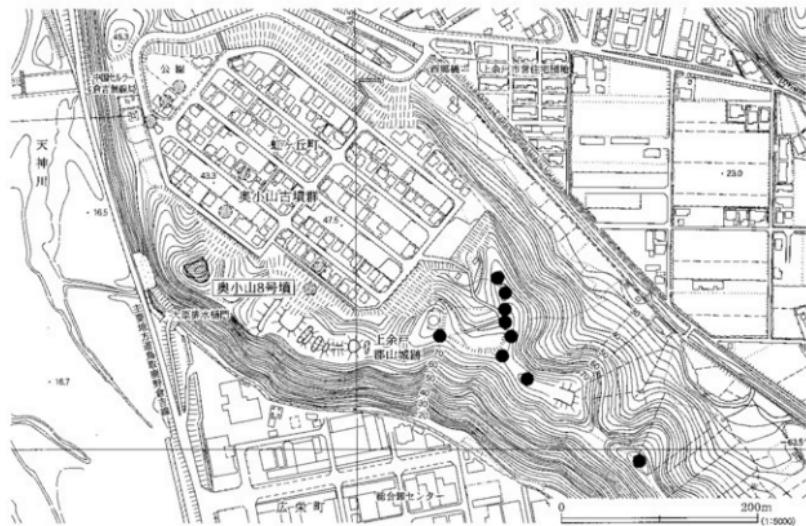
平安時代以降の寺院跡は、四王寺跡（75）・大日寺遺跡群・広瀬廃寺がある。

| | | | | |
|------------|-------------|---------------|------------|-------------|
| 1 原古墳群 | 22 米里鶴岡出土地 | 43 佐美遺跡 | 64 和田城跡 | 85 中尾遺跡 |
| 2 種波古墳群 | 23 米里第2遺跡 | 44 佐美古墳群 | 65 中峰古墳群 | 86 大谷古墳群 |
| 3 宮ノ前遺跡 | 24 下張坪遺跡 | 45 大平古墳群 | 66 屋喜山9号墳 | 87 古墳群 |
| 4 曲古墳群 | 25 米里第1遺跡 | 46 山根遺跡 | 67 屋喜山古墳群 | 88 大谷後口谷墳丘墓 |
| 5 北尾古墳群 | 26 船渡遺跡 | 47 向山古墳群 | 68 柴栗古墳群 | 89 向野遺跡 |
| 6 島刈山遺跡 | 27 土下210号墳 | 48 向山古墳群樋口支群 | 69 上神大将塚古墳 | 90 古神宮古墓 |
| 7 島遺跡 | 28 土下212号墳 | 49 小田鶴岡出土地 | 70 猫山遺跡 | 91 打塚遺跡 |
| 8 島古墳群 | 29 土下213号墳 | 50 向山古墳群宮ノ峰支群 | 71 西前遺跡 | 92 櫻塚遺跡 |
| 9 曲226号墳 | 30 土下211号墳 | 51 向山古墳群堤谷支群 | 72 トドロケ遺跡 | 93 国分寺古墳 |
| 10 上神44号墳 | 31 土下古墳群 | 52 向山6号墳 | 73 東狹間古墳 | 94 宮ノ下遺跡 |
| 11 上神45号墳 | 32 上通遺跡 | 53 三明寺大将塚古墳 | 74 イキス遺跡 | 95 伯耆国分尼寺跡 |
| 12 上神48号墳 | 33 南屋敷遺跡 | 54 長谷遺跡 | 75 四王寺跡 | 96 伯耆国分寺跡 |
| 13 上神51号墳 | 34 徳田沖遺跡 | 55 向山309号墳 | 76 大谷城跡 | 97 伯耆国衙跡 |
| 14 上神119号墳 | 35 日下山城跡 | 56 向山310号墳 | 77 三度舞墳丘墓 | 98 河原毛田遺跡 |
| 15 クズマ遺跡 | 36 長江・田後古墳群 | 57 上養水遺跡 | 78 イザ原遺跡 | 99 今倉遺跡 |
| 16 イガミ松遺跡 | 37 福庭古墳 | 58 養水古墳群 | 79 大谷大将塚古墳 | 100 今倉城跡 |
| 17 西山遺跡 | 38 清谷古墳群 | 59 田内城跡 | 80 小林古墳群 | 101 鳴ノ掛遺跡 |
| 18 桜木遺跡 | 39 大平山古墳群 | 60 三明寺古墳 | 81 イザ原古墳群 | 102 岩屋遺跡 |
| 19 谷畠遺跡 | 40 大平山171号墳 | 61 和田東城跡 | 82 沢ベリ遺跡1次 | 103 矢戸遺跡1次 |
| 20 上神宮ノ前遺跡 | 41 海田古墳群 | 62 平ル林遺跡 | 83 沢ベリ遺跡2次 | 104 矢戸遺跡2次 |
| 21 上神古墳群 | 42 福庭遺跡 | 63 夏谷遺跡 | 84 不入岡遺跡 | 105 北ノ城跡 |



第1図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

| | | | | | | | | | |
|-----|----------|-----|--------|-----|-----------|-----|-------|-----|-------|
| 106 | 空岡田遺跡 | 115 | 大御堂廬寺 | 124 | 奥小山古墳群 | 133 | 本泉遺跡 | 142 | 野煙古墳群 |
| 107 | 八幡平ラ遺跡 | 116 | 松ヶ坪遺跡 | 125 | 上余戸郡山城跡 | 134 | 本泉古墳群 | 143 | 石塚廬寺 |
| 108 | 赤岩城跡 | 117 | 弥平林1号墳 | 126 | 裾ヶ谷墳丘墓 | 135 | 今泉古墳群 | | |
| 109 | 宮ノ平ル遺跡 | 118 | 東谷遺跡 | 127 | 大原城跡 | 136 | 山際古墳群 | | |
| 110 | 芸才寺1号墳 | 119 | 梅田遺跡 | 128 | 大原廬寺 | 137 | 下西野遺跡 | | |
| 111 | 高畔古墳群 | 120 | 東山田1号墳 | 129 | 円谷城跡 | 138 | 東鶴遺跡 | | |
| 112 | 四十二九城跡 | 121 | 僧ヶ平遺跡 | 130 | 大瀬古墳群 | 139 | 大畠遺跡 | | |
| 113 | 吹城跡 | 122 | 烟ヶ田遺跡 | 131 | 間狭平第1~3遺跡 | 140 | 大宮古墳 | | |
| 114 | 山名氏館跡推定地 | 123 | 若槻山遺跡 | 132 | 若宮古墳群 | 141 | 市場城跡 | | |



第2図 奥小山8号墳調査区位置図

城跡は、小鶴氏の居城岩倉城跡、伯耆守護山名氏居城の田内城跡(59)、打吹城跡(113)、山名氏館跡推定地(114)、山名氏関連の円谷城跡(129)がある。

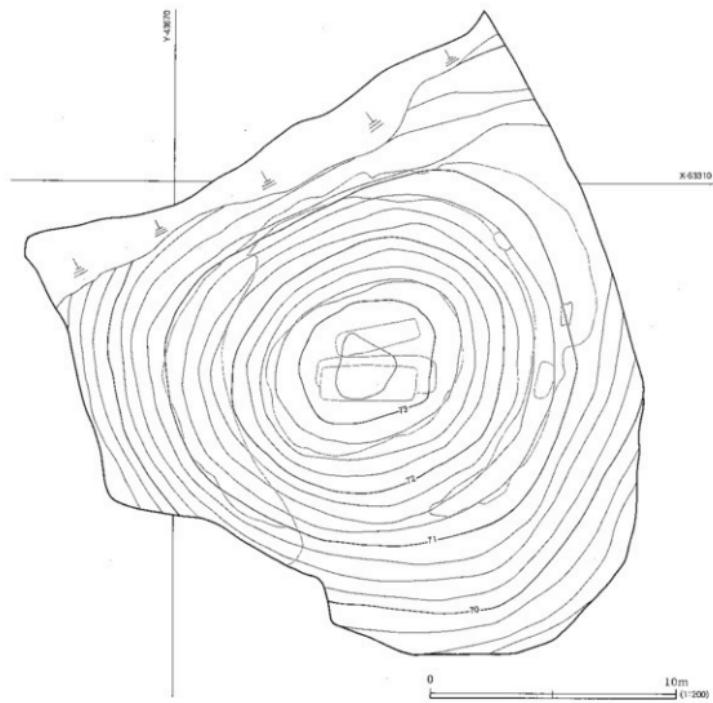
III 調査の概要

調査は、墳丘および周辺地形の測量を行って地形図を作成し、墳丘の中心点より墳丘を4区画に分け、各区画に断面観察用ベルトを設定して、人力による表土除去作業を行った。墳丘表土を除去し、墳丘頂部を掘り下げて主體部の検出を行い、同時に周溝を掘り下げた。主體部は破壊を受けておらず、墳丘上に3基を確認した。周溝内においては木棺墓1基、土器棺墓1基、土壤墓1基を検出し、供獻土器も出土した。

遺構の測量は、主體部・周溝内埋葬施設と遺物出土状況図が1/10で、その他の遺構は1/20の縮尺で実測した。調査地の地形測量は平板を使用し、1/100、25cmごとの等高線で測量した。調査面積は約290m²である。

1 遺構

墳丘 南東から北西方向に延びる丘陵が、天神川の支流である竹田川に接し北に折れる標高約73m付近に立地する円墳である。古墳の南側は尾根の鞍部となり、また西側は川に面して急傾斜でおちる。調査前は、墳丘頂部に平坦部分が認められていた。調査後の墳丘の直径は、東西約18.0m・南北約14.0mあり、周溝底からの高さは東側約3.0mである。墳丘は、尾根地形をそのまま利用し周溝を掘り下げた土で水平に盛り上げたもので、盛土の厚い東側では、旧地表面から0.55m遺存する。

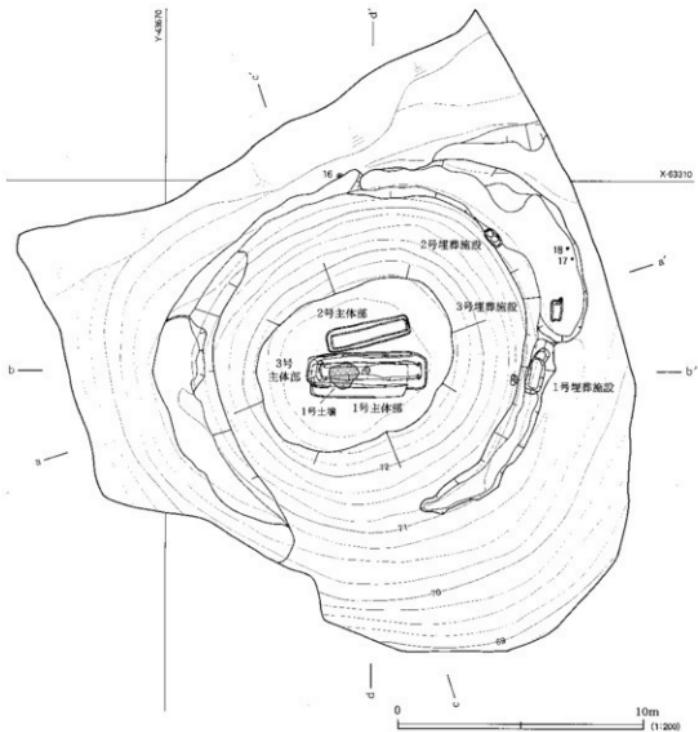


第3図 調査前地形測量図

周溝 墳丘の東側半分は尾根を切断し、西側は急斜面をカットし平坦部分を設け墓域を区画する。北側は後世の造成による消失かあるいは流失かは不明。南側は地山が露出しており掘り込みは認められない。東側は、南北約6mの範囲で幅が広くなり、南東部分より1段深くなる。周溝幅は、東側が最大で約3.0mあり、南東側付近より南側は約1.1mで狭くなる。検出面からの深さは、東側で最大約0.65m、南東側で約0.20m、西側は約0.15~0.2mである。周溝断面は、東側は浅い逆台形、南東側はU字形、西側が平坦である。埋葬施設は、南東側で1基、東側で1基、北東側墳丘裾寄りで1基検出した。遺物は、北側の外縁寄りの底で土師器直口壺(16)が止位で出土した。墳丘からの転落であると考えられる遺物は、周溝S E区の埋土中から土師器壺(8・9)・須恵器环身(20・21)、北東側2号周溝内埋葬施設周辺の底から土師器直口壺(7)・高环(11・12・15)、北西側埋土中から土師器壺(19)が出土した。

主体部 墳頂平坦面において3基検出した。

1号主体部 墳丘中央からわずかに南寄りのところに位置し、3号主体部と切り合う。主軸方向はN90°Eである。墓壙の平面形は隅丸長方形である。掘り方は2段になっており、規模は1段目が長さ3.94m・幅1.35m・深

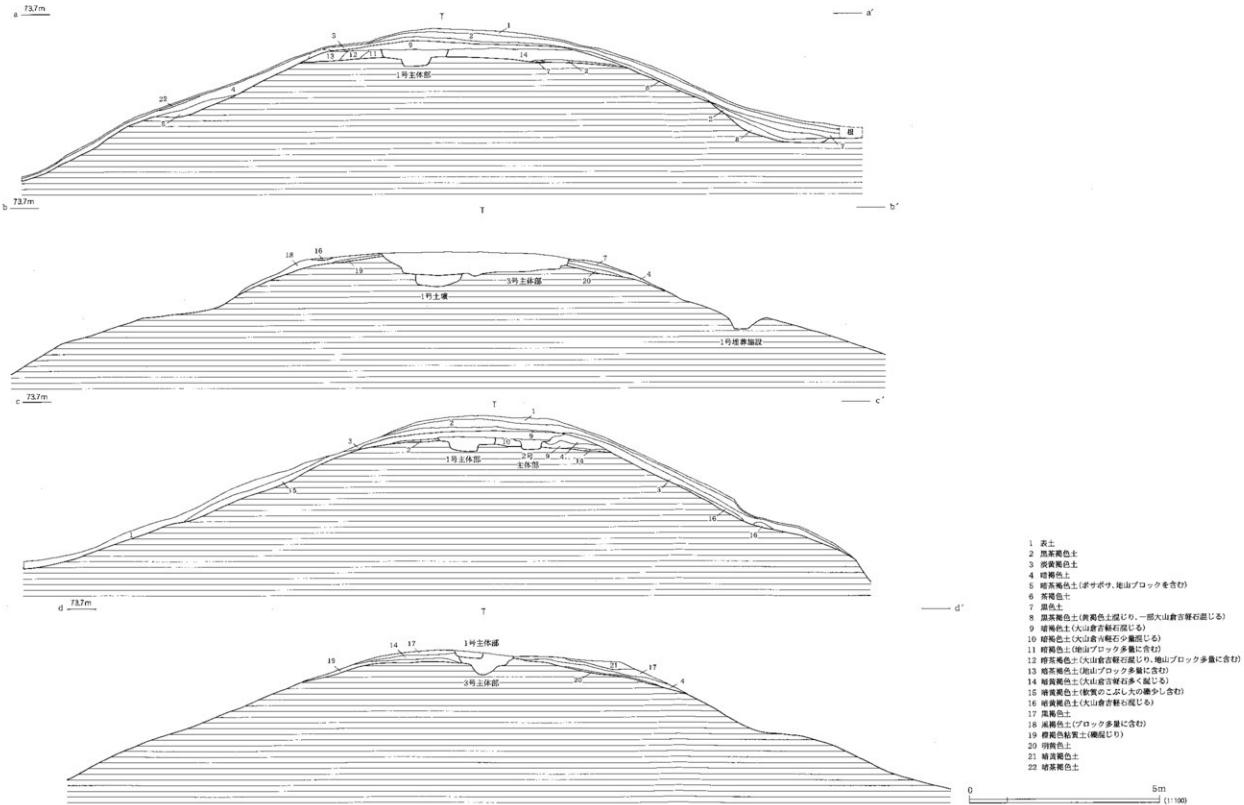


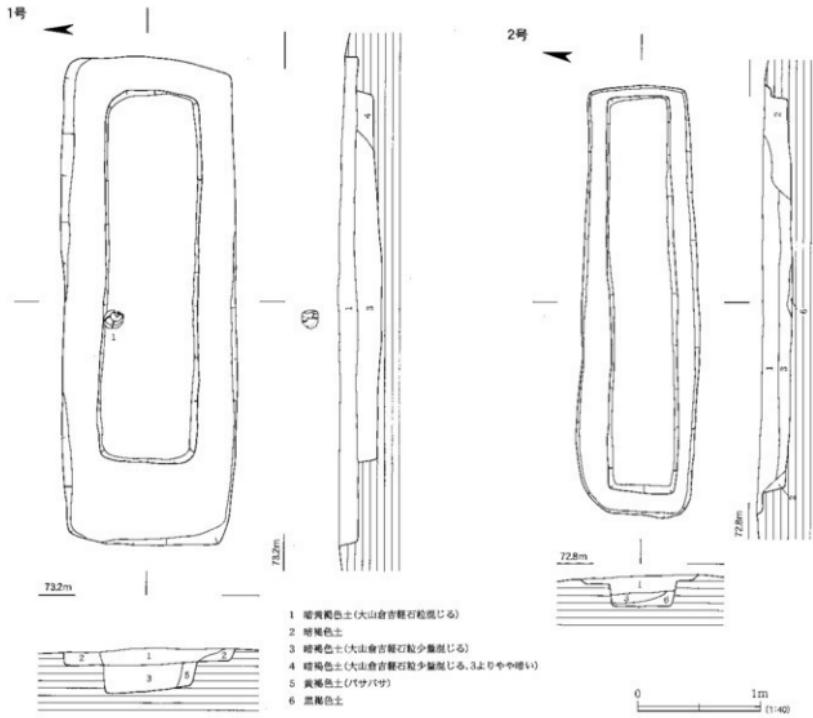
第4図 奥小山8号墳遺構全体図

さ0.13m、2段目が長さ2.96m・幅0.69m・深さ0.21mである。検出面から墓壙底までの深さは最も深いところで0.34mで、東側が4cm高く頭位は東側と推定される。埋土の堆積状況と断面の立ち上がりから木棺墓と推定される。木棺規模は、内法で長さ2.50m・幅0.58mである。墓壙検出面ほぼ中央付近で土師器直口壺（1）が出土した。供献土器と考えられる。人骨、副葬品等は出土しなかった。

2号主体部 墳丘中央から東寄りに位置し、1号主体部から約2m北に離れる。主軸方向はN81°Eである。墓壙の平面形は隅丸長方形である。掘り方は2段になっており、規模は1段目が長さ3.46m・幅0.86m・深さ0.05m、2段目が長さ3.16m・幅0.48m・深さ0.20mである。検出面から墓壙底までの深さは最も深いところで0.25mである。埋土の堆積状況と断面の立ち上がりから木棺墓と推定される。木棺規模は、内法で長さ2.23m・幅0.47mである。墓壙検出面中央のやや東寄りで土師器直口壺（6）・高环（10）が出土した。供献土器と考えられる。人骨、副葬品は出土しなかった。

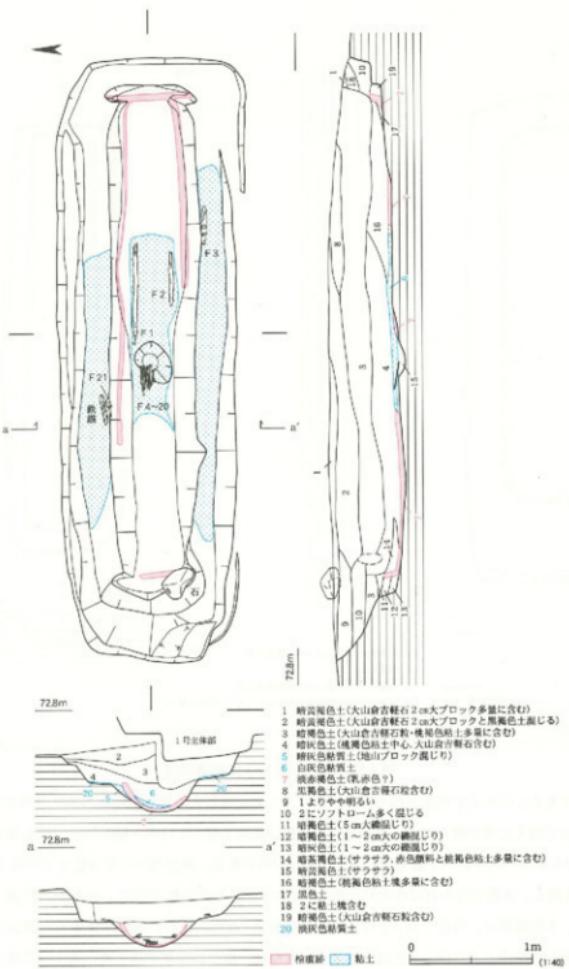
3号主体部 墳丘中央に位置し、1号主体部と切り合う。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈する。掘り方は2段になっており、規模は1段目が長さ4.84m・幅1.15m・深さ0.39m、2段目の規模は、長さ4.15m・幅0.69mで、1段目の底面をさらに掘り下げる。2段目の掘り方は、平面及び断面観察により乳赤色の木棺痕跡が確認され、





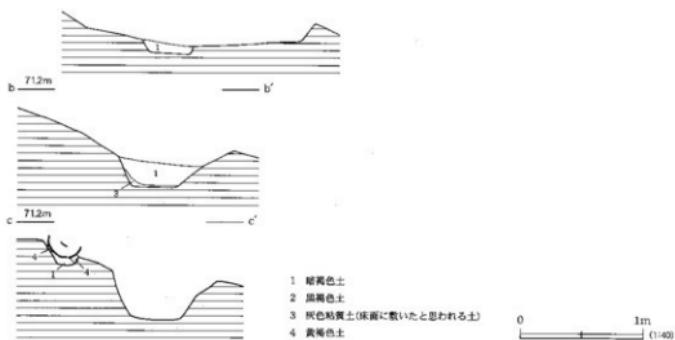
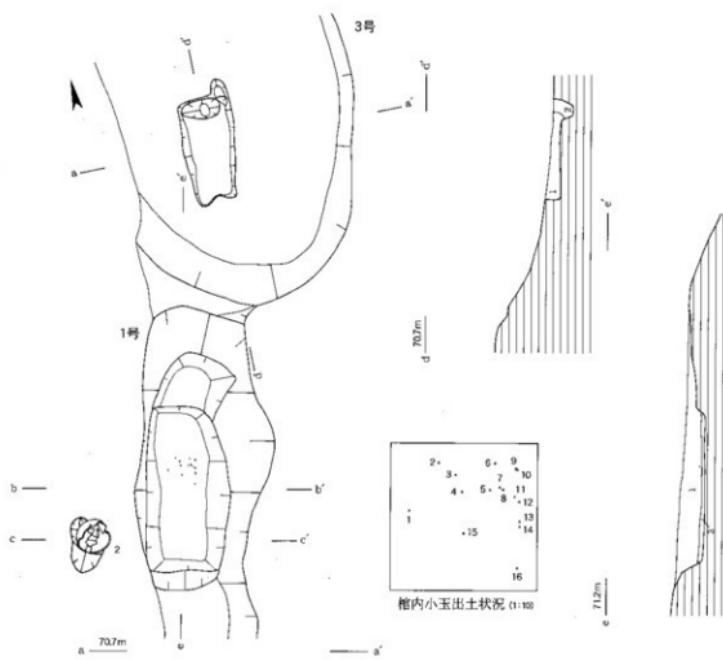
第6図 1号・2号主体部遺構図

断面がU字状であることから割竹形木棺を据えた掘り方と考えられる。主軸方向はN90°Eである。両小口側には、小口板を立て据えた溝が掘られる。溝の掘り方規模は東側で長さ0.71m・幅0.14m、最も深いところで0.11m、西側で長さ0.67m・幅0.14m、最も深いところで0.22mである。検出面から墓壙底までの深さは最も深いところで0.63mを測る。木棺底面のほぼ中央に、長さ0.36m・幅0.24mの楕円形で、底面からの深さ0.06mの規模の土壤がある。木棺規模は、内法で長さ3.87m・幅は中央で0.48m、東小口側のすぼまった部分で0.25m、1段目の掘り方底面から棺底までの深さは0.21mである。木棺は、棺の両端がすぼまり、両小口を板で塞ぐ。棺痕跡から、棺の厚さは1~5cm、小口板の厚さは東側で6cm、西側で4cmである。棺底は東側が10cm高く、頭位は東と推定される。墓壙掘り方の1段目の底面北側で東西約2.3m、南側で東西約3.1mの範囲で比較的硬質の淡灰色粘土が約1cm程度の厚さで貼られていた。また、棺底の中央約1.6mの範囲に比較的軟質の白灰色粘土が3~4cmの厚さで貼られていた。棺と墓壙との隙間には、棺を固定するため、暗灰色粘土を多量に含む粘質土で固定していた。西小口部の小口板痕跡の上や南寄り、墓壙底から約50cmのところで長さ28cm・幅18cm・厚さ17cmの底面ほぼ平らな石が水平な状態で出土した。出土位置、状況から小口板の押さえ石の可能性が考えられる。墓壙検出面東側付近で土師器高坏(13・14)が出土した。供獻土器と考えられる。

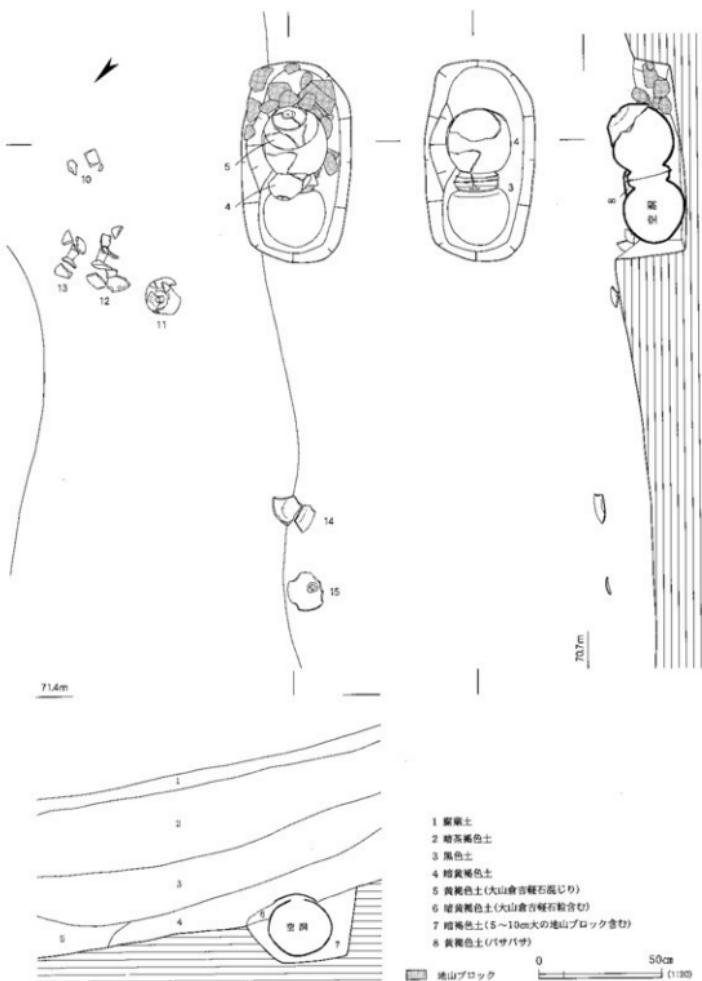


第7図 3号主体部造構図

棺内外で鉄器が多量に出土した。棺外では、墓壙掘り方1段目の南側底面で鉄槍(F 3)1点が槍先を東に向けて出土した。木質部は腐食して遺存しないが、墓壙規模から推定すると2m以内の柄が考えられる。北側底面では、鉄鎌(F 21~24)が棺中央のやや西寄りで鎌身部を東に向けて出土した。棺内では、中央北寄りの棺底で、鉄刀(F 1)1点が切先を西側に向けて出土した。検出時で確認した長さは85cmで、太刀と推定される。中央南寄りの棺底で、鉄剣(F 2)1点が切先を西に向けて出土した。さらにはほぼ中央の棺底で、鉄鎌(F 4~20)17点が鎌身部を東に向けて束になって出土した。人骨は出土しなかった。



第8図 1号・3号埋葬施設遺構図



第9図 2号埋葬施設遺構図・周辺出土遺物状況図

1号埋葬施設 東側の周溝が狭くなる部分の底に位置する土壤墓である。主軸方向はN24°Eで周溝に並行する。墓壙の平面形は隅丸長方形である。墓壙の規模は長さ1.19m・幅0.36m、検出面からの深さは0.21mである。棺底のほぼ中央付近で、計22個の滑石製の小玉（J 1～22）が出土した。人骨は遺存しない。

埋葬施設の西側約0.3m離れた埴垣部分に、直径約0.3m、深さ0.15m掘り下げて土師器甕（2）が正位で出土した。供献土器と考えられる。

2号埋葬施設 北東側の埴輪周溝に位置する土器棺墓である。主軸方向はN135°Eで周溝に並行する。土師器壺（3）を棺身、甕（4）を棺蓋とする合口土器棺で、棺の長さは0.58mである。墓壇の平面形は隅丸長方形である。墓壇の規模は、長さ0.75m・幅0.26m、周溝底からの深さ0.23mで、墓壇掘り下げ時の地山ブロックを南側の墓壇底に敷いて棺蓋を固定し、棺底に対して6°上に向けた状態で埋置していた。棺蓋は底部を穿孔した後、土師器高环の坏部（5）で塞いでいた。さらに穿孔時の破片で合口の目張りとしていた。棺内からは人骨や副葬品等は出土しなかった。

3号埋葬施設 東側の周溝幅が広くなった底に位置する。主軸方向はN2°Eで周溝に並行する。墓壇の平面形は歪な隅丸長方形である。墓壇底には、小口板と側板を据え立てた溝が残っており木棺墓と考えられる。棺の規模は、内法で長さ0.63m、幅0.30m程度である。側板の長さは東側で0.87mと推定され、両小口間より長くなっている。小口板を側板で挟み込むような形態の木棺と推定される。

遺物は、埋葬施設から北東に約2.0m離れた周溝底で、須恵器把手付甕（17）・壺身（18）の2点が正位で出土した。供獻土器の可能性がある。人骨や副葬品等は出土しなかった。

1号土壙 3号主体部直下で検出。平面形は歪な円形あるいは方形様である。規模は長さ1.05m、幅0.81m、深さは最も深いところで0.60mである。3号主体部底からの深さは0.30mである。土壙埋土は単層である。遺物は出土しなかった。断面の観察から、ほぼ短期間で埋没した後、3号主体部に切られている。3号主体部との関係は不明だが、8号埴輪造の際の祭祀土壙の可能性も考えられる。

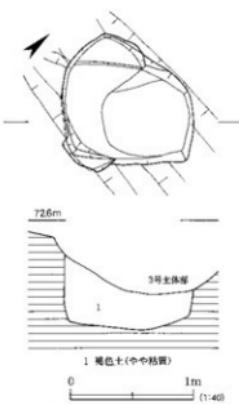
2 遺物

遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・鉄製品・小玉・石製品が出土した。土器・鉄製品・小玉の説明は表に一括した。須恵器は、器壁断面を墨で塗りつぶして図示した。出土位置を遺構平面図に図示したものは、表中の遺物Noをゴシック体で表した。

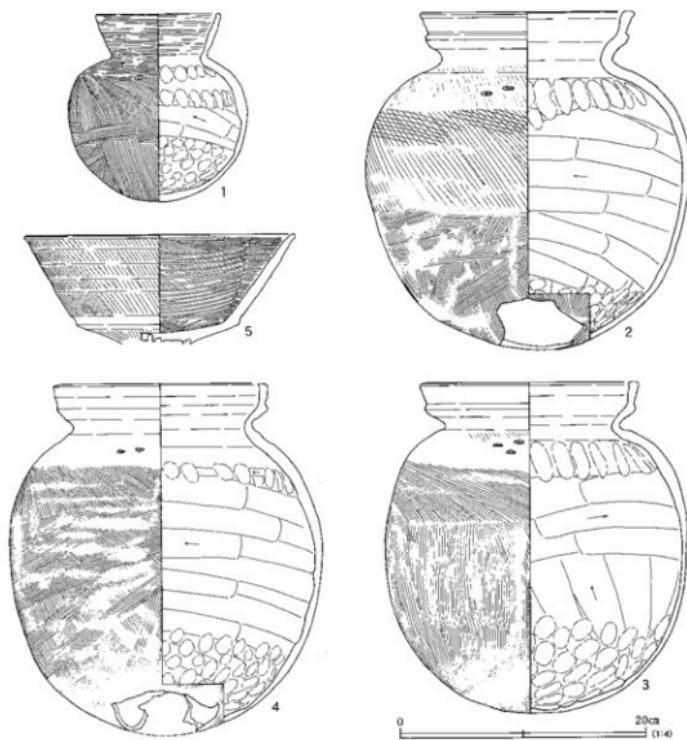
土器観察表

(注釈()は推定値)

| 出土位置 | No | 器種 | 法量(cm) | 形態 | 手 壁 | 胎土 槌成 泥調 保存度 |
|-----------------|----|-----|-------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------|
| 1号主体部直上 供獻土器 | 1 | 直口壺 | 口径(9.8) 最大胴径 14.6 基高(15.0) | 口縁部は外方に直線的にのびる。口縁部は内方にわざかに肥厚する。体部は球形だが少しこねがちである。肩部外縁横状工具による刺突痕2箇有り。 | 口縁部外側ヨコカナア調整後横方向の先端にへタケナ。体部外側横方向の極端にへタケナ。調整後横方向の横方向にへタケナ。調整後横方向以下横方向にへタケナ。質には及ばない。肩部内面角傾き。底部の内面にラケズリ後ナメ、横状工具による圧痕残る。 | 2mm以下の砂粒を少量含む。焼成褐色。口縫部欠損。体部完形。 |
| 1号埋葬施設 供獻土器 | 2 | 甕 | 口径 15.8 最大胴径 26.3 基高 27.6 | 口縁部はやや外方に開く二重口縁で端部は角張る。端部は水平で外側へ肥厚して棱形となる。体部は側剖面で肩部やや弧曲する。肩部外縁横状工具による刺突痕2箇有り。底部に焼成後の8×6cmの穿孔が内側から施される。 | 口縁部内面ヨコカナ。体部外縁質部分にかけて粗い目のハケメ調整後、調整後下位から底部にかけて細かい目のハケメ残る。体部内面は肩部及び底部に指圧痕有り。 | 5mm以下の砂粒を含む。焼成黄褐色。口縫部汚損有り。体部はほぼ完形。 |
| 2号埋葬施設 壺身 | 3 | 甕 | 口径 16.2 最大胴径 24.5 基高 27.0 | 口縁部は直立だが外方弧味にたしかに膨らむ。端部は角張る。端部は水平で内側に肥厚する。体部はやや肩部がなる傾斜形。肩部外縁横状工具による刺突痕3箇有り。 | 肩部外縁横方向の細かいハケメが残る。肩部外縁上位は横方向から斜方向、底部にかけては縱方向の細かい目のハケメ調整。底部の内面ナメ。肩部と底部内面には指圧痕が残る。肩部内面上部は横方向のハケメ。以下横方向のハケメ。 | 5mm以下の砂粒を含む。焼成良好。法螺褐色。完形。 |



第10図 1号土壙遺構図



第11図 土器1

(法量()は推定値)

| 出土位置 | No | 器種 | 法量(cm) | 形態 | 手法 | 埴土 塗成 色調 遺存度 |
|-------------------------|----|-----|------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------|
| 2号埋葬施設 棺蓋 | 4 | 甕 | 口径 15.9 最大胴径 35.4 器高 (28.8) | 口縁部はほぼ直立に立ち上がり、腹部は角張る。横断面は水平面に比較的近く、底部は斜面状で内側には斜面状の凹部による斜板2箇所あり、底部に焼成後の15×3×9cmの穿孔が内側から残される。 | 外面部頸構方向のハケメ調整後ナデ、腹部傾斜方向のハケメ、底部ナデ。内面部左上方へのラケズリ、肩部にケズリはない。底部ハラケズリ後圧定。 | 5mm以下の砂粒を含む。焼成良好。赤褐色。完璧。 |
| 2号埋葬施設 棺蓋 | 5 | 高环 | 口径 21.6 | 深大型。厚手。壺つつきり。口縁部は直線的に外方に広く伸びる。口縁端部はわずかに外反しない。口縁部と环底部との間に縫をもつ。环底部外側小孔2個有り。脚部結合面で剥落。 | 口縁部外側左前方向の粗いハケメ調整後、口縁端部と环底部の縫をコナダ。环底部外側放射状のハケメ調整後にて外側の内面粗く残す。环部内面横方向のハケメ後五角形状焼成方向にラミガキを施すがハケメが残る。环底部内面放射状のハラケズリ。 | 3mm以下の砂粒を含む。焼成良好。赤褐色。环部完形。 |
| 埴頂部 (2号主体部焼出 面中央) | 6 | 直口甕 | 口径 (9.4) 最大胴径 14.4 器高 (14.2) | 口縁部は外方に直線的にのびる。口縁端部は外側に後をつくる。体部は肩の要る扁球形。壺つつき底。 | 口縁部内面コナダ。体部の表面方向のハケメ調整後、口縁端部方向のヘラミガキ。脚部内面横方向のハラケズリ。大きさ15mm以下の爪状の瓦礫が多数残る。 | 3mm以下の砂粒を含む。焼成良好。赤褐色。体部外側全体に付着、底部4×3cm大的剥離面の上にも付着。口縁部、体部汚損。 |
| 周溝N-E区 | 7 | 直口甕 | 口径 (9.6) 最大胴径 (15.0) | 口縁部は外方に直線的にのびる。体部内面に1箇の凹縫をめぐらし縫をつくる。底部は丸い。体部はなでて肩の弱部に焼き痕部は大きく張る。体部端縁形。 | 外面部肩部へラミガキ後ナデ。体部ハケメ調整。内面部肩部以下脚部下部にかけて横方向に比較的丁寧なラケズリ。底部に指痕压痕残る。 | 1mm以下の砂粒を含む。焼成良好。赤褐色。外面部全体に剥付着。口縁部、肩～脚部汚損。 |



第12図 土器2

(法量()は推定値)

| 出土位置 | 號 | 器種 | 法量(cm) | 形態 | 手法 | 胎土 焼成 色調 遺存度 |
|---------------|---|----|----------|-----------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------|
| 周溝Ⅲベルト及び周溝ⅢE区 | 8 | 甕 | 口徑(10.2) | 口縁部は直立し縦部は外側に曲をなす。縦部内側に1条の沈痕をめぐらせて縦をつくる。体部球形で縦部直下強いヨコナデによる段がある。 | 口縁部内外ともヨコナデ調整。体部外表面は割方向の長い目のハケメ調整。縦部外表面は割方向のハケメが残る。縦部内面右方向のヘラカズリ。縦部内面施錆斑痕がある。 | 5mm以下砂粒を比較的多量に含む。焼成普通。淡黄褐色。外側全表面付着。口縁部/6、縦部1/4程度。 |

| 出土位置 | No. | 器種 | 法量(cm) | 形態 | 手法 | 粘土 燐成 色調 遺存度 |
|---------------------------------------|-----|-----------------|--------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------|
| 周溝SE区 | 9 | 甌 | 口径 15.6 最大深度 25.1 | 口縁部はほぼ直立し、底部は画面をなし内側にわざかに肥厚する。底部部の棱は沈線をめぐらせてつくる。底部には強いヨコナデによる段差がなく、底部外側小口状工具による刻込み1箇有り。 | 口縁部内外面ヨコナデ。体部横方向のハケメ調整後腰部横方向のハケメ。肩部ヲナデ消す。底部は底部中心のハケメ。内面肩部から腹部にかけて腰頭圧痕。体部左上方部にケズリ上げた後右方向にヘラケズリ。 | 5mm以下の砂粒を含む。焼成良好。底頭褐色。体部外表面付着、底部欠損。 |
| 2号主部鉢検出 面東小口側及び 埴頂部E区、周 溝NE区 | 10 | 高环 | 口径 (24.1) 脚径 12.9 | 口縁部は直線的に外方に長くのび、口縁端部はわざかに外側へ少し。口縁部と埴頂部の境には2条の沈線をもつ。底部は柱状部との境には1条の沈線をめぐらす。 大筋の底部。上位が先ずぼりで、下位が外方に強く柱状部と外方に大きく開く窪部。柱状部から底部にかけて強く屈曲する。 | 環部外表面方向のハケメ調整後ヨコナデ。内面横方向のハケメ調整後ナダメ輪文風のヘリミガキを多角形に横方向に施す。外編状底部横方向のハケメ後、疎な横方向へのラミガキ。底部画面平滑でミガキ後ナダメカ。輪文カットのまま。内面柱状部棒状工具の製具痕、底部ハケメ調整後ナダメ。 | 1mm以下の砂粒を含む。焼成良好。底頭褐色。口縁部外表面なし、底部欠損。 |
| 周溝NE区 | 11 | 高环 | 口径 13.7 脚径 8.3 基高 11.7 | 全体に型。口縁部はやや内側しながら外方へのびる。口縁部は横内側に段をつくり内側に凸面をなし。口縁部と底部との境には横の棱をつくす。底部部の上位が先ずはまりて下位が外方に開く柱状部と外方に大きめに窪部となる。底部と脚部との境には細い沈線をめぐらす。 | 環部外表面は斜方向のハケメ後ヨコナデ。環部内面は横内側のやや粗いヘリミガキで横方向に横方向を残す。底頭部内面放射状のヘリミガキ。柱状部外表面取り回し。柱状部内面は型具痕と絞り目。底部は外壁平滑。脚部カット面のまま。内面横方向のハケメ。 | 1mm以下の砂粒を含む。焼成良好。底頭褐色。口縁部一部及び底部欠損。 |
| 周溝NE区 | 12 | 高环 | 口径 16.2 脚径 9.5 基高 12.8 | 口縁部はやや内側ながら外方に開く。柱状部から底部にかけて強く屈曲する。脚部部は不整形。 | 外編状利用方向へラミガキを省略したのみ。环部外表面横内側方向へラミガキの粗筋を残す。また型取の後の粘土のしわを残す。口縁部及び柱状部上位ヨコナデ。环部内面は横内側方向のヘリミガキ。底部内面は放射状のヘリミガキ。柱状部外表面は横取り。柱状部内面には絞り目が残る。内面横方向のハケメ後ナダメ。 | 3mm以下の砂粒を含む。焼成良好。赤褐色。口縁部、底部欠損。 |
| 埴頂SE区 周溝NE区 | 13 | 高环 | 口径 (15.6) 脚径 9.1 基高 13.4 | 环部弱い折形。口縁部は小さく屈曲をなす。比較的長い柱状部で脚部部は角張るが不整形。底部と脚部との境に1条の沈線をめぐらす。底部内面にヘラ記号有り。 | 環部外縫方向のハケメ後口縁部ヨコナデ。环部外表面横内側後方向のヘリミガキ。柱状部内面放射状2筋のヘリミガキで横方向のハケメを残す。柱状部外表面取り出後底部全体横内側方向のヘリミガキ。内面型具痕、底部画面ハケメ調整後ナダメ、指紋压痕を明瞭に残す。 | 1mm以下の砂粒を含む。焼成良好。底頭褐色。牙形部、脚部欠損。 |
| 周溝SE区 周溝SE区 | 14 | 高环 | 口径 17.4 脚径 9.5 | 底部は柱状で浅い。口縁部は小さく角張る。底部と脚部との境に沈線をめぐらす。比較的長い柱状部と外方に大きく開く脚部からなる。 | 环部外横内側の繊維的な回転利用方向のヘリミガキ。横方向のハケメ見出す。环部内面は横内側放射状のヘリミガキ後横内側に放射状に疎なヘリミガキ、斜方向のハケメ見出す。柱状部内面は柱状部の横の屈曲を利用してラミガキ。柱部内面放射状、柱状部内面型具痕にひび割れ。底部内面ナダメ、内面指紋压痕が残る。 | 2mm以下の砂粒を含む。焼成良好。底頭褐色、脚部暗褐色。口縁部外表面、脚部一部欠損。 |
| 周溝NE区 | 15 | 高环 | 口径 14.7 脚径 9.8 基高 13.3 | 井筒底い形で口縁部内側角張。口縁部は丸い。比較的長い柱状部で脚部部は角張る。底部と脚部との境に1条の沈線をめぐらす。 | 底部内面横方向のハケメ調整後口縁部をヨコナデしてハケメを消す。环部内面放射状の横の屈曲を利用してラミガキ。底部附近ハケメ残す。柱状部外表面取回し。底部画面平滑。柱状部内面型具痕にひび割れ。底部内面ナダメ、内面指紋压痕が残る。 | 1mm以下の砂粒を含む。焼成良好。底頭褐色。环部は兜形、脚部外表面欠損。 |
| 周溝NE区底部 | 16 | 直口甌 | 口径 9.4 最大深度 14.5 基高 14.1 | 口縁部は直線的にのび、口縁端部は丸い。体部は球形だがやや肩が張る。肩部に棒状工具による刻込み1箇有り。底部に焼成工具の4×2cmの穿孔が内側から施される。 | 口縁部内外面ヨコナデ調整するが外側に横方向のハケメ残す。底部強いヨコナデにより削除する。底部内面ヘリミガキ。底部外表面は前方向にハケメ調整後肩部から脚部にかけて横方向のハケメ調整。底部内面は肩部から底部下まで横方向のヘリミガキ。底部内面には板状及び棒状工具による压痕が残る。 | 1mm以下の砂粒を含む。焼成良好。底頭褐色。外壁全體特に肩部下半部付着。完形。 |
| 周溝NE区底部 | 17 | 須惠器 把手付 甌 | 口径 7.0 ~7.6 脚径 6.2 | 口縁部内部に段をなす。口縁部と体部との境に断面三尖形の突起が2条、底部と底部との境に凹部に凹部を施し、間に帶状波状紋がめぐらす。体部には直状の把手と、把手上面に豆粒状の飾りが付く。 | 底部内面不定方向のハケメ後ナダメ仕上げ。全体に粗面なつくり。 | 1mm以下の砂粒を含む。焼成良好。体部1方向、底部内面に灰がかかり、他の側面の口縁部等が溶着。青灰色。完形。 |
| 周溝NE区底部 | 18 | 須惠器 环 身 | 口径 10.7 基高 4.8 | たち上がりが高く、内側の度合いは少ない。底部は丸い。底部は短くや上向きにのびる。 | 底部外表面計回りのヘリミガキ。底部内面仕上げナダメ。 | 2mm以下の砂粒を含む。焼成良好。暗褐色。口縁部一部欠損、ほぼ完形。 |

(法量 () は推定値)

| 出土位置 | No. | 器種 | 注量(cm) | 形 態 | 手 法 | 胎 熟成 色調 遺存度 |
|----------------------|-----|------------|--------------------|--------------------------------|--------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------|
| 周溝NW区 | 19 | 甕 | 口径(18.8) | 口縁部は外反し、口縁端部は丸い。厚手。 | 口縁部内外面コナダ。外面底部以下幅方向の非常に細かい目のハケメ。内面ナゲで粘土痕跡が確認に残す。 | 3mm以下の砂粒を含む。焼成良好。灰黄褐色。口縁部から瓶肩にかけて少遺存。 |
| 周溝NE区 (3号埋葬施設付近北) | 20 | 須恵器 杯 身 | 口径 10.8 高さ 3.5 | たち上がりの矮小化した小型。 | 底部外面へラ切り後ナテ仕上げ。底面等多。底部内面多方向のナゲ。 | 1mm以下の砂粒を含む。焼成良好。受部にホロ付着。他の全体の口縁部が溶着。杯身として完成。淡青灰色。口縁部を部分的に欠損。ほぼ完形。 |
| 周溝SE区 (3号埋葬施設付近南) | 21 | 須恵器 杯 身 | 口径(10.9) 高さ 3.5 | たち上がりは比較的長い内傾著しい。 小型で器高が低い。 | 底部外面へラ切りナテ仕上げ。底部内面広い範囲をナゲ。 | 3mm以下の砂粒を含む。焼成良好。底面溶着。口縁部少遺存。 |
| 埴頂部 | 22 | 奈良器 土器裏 | | | 体部外側方向の粗いハケメ。内面新方向のナゲ。 | 3mm以下の砂粒を含む。焼成良好。外腹厚く保付着。灰黄褐色。瓶部少遺存。 |

鉄刀・鉄劍・鉄槍計測表

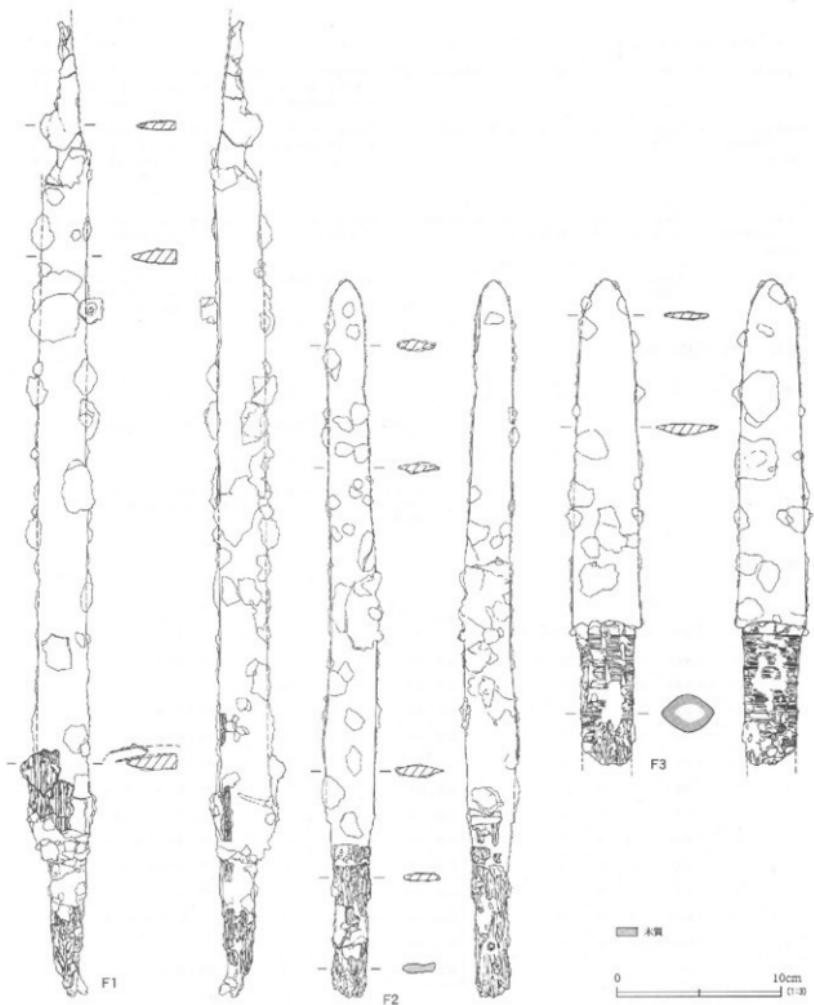
(cm : () は残存)

| 遺物No. | 種類 | 全長 | 身 身 先 輪×厚さ | 身 元 幅×厚さ | 茎 長さ×幅×厚さ | 備 考 | | |
|-------|----|------|---------------------|-------------|--------------|---------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|---|
| | | | | | | 輪 | 被 | 茎 |
| F 1 | 鉄刀 | (60) | (51.5) | 2.5×0.5 | 3.1×0.9 | (8.5)×1.7×0.5 | 太刀。柄の木質付着。茎部木質付着。切先欠損。検出時は全長約50cm確認。 | |
| F 2 | 鉄劍 | 43.7 | 33.2 | 2.4×0.7 | 3.0×0.8 | 11.0×1.7×0.6 | 完形。茎部木質付着。両側。両端。茎は先尖る。 | |
| F 3 | 鉄槍 | 29.6 | 21.2 | 3.0×0.5 | 4.2×0.7 | 8.4×—×— | 完形。茎部木質・糸遺存。柄木に接着部を捲き込んで幅約0.5mmの糸2本1単位として巻いて固定。刃部まで柄端が反る。所縁の平面形状は三角形。柄の断面形は杏仁形をなし。表面が穂を形成。 | |

鉄鎌計測表

(mm : () は残存)

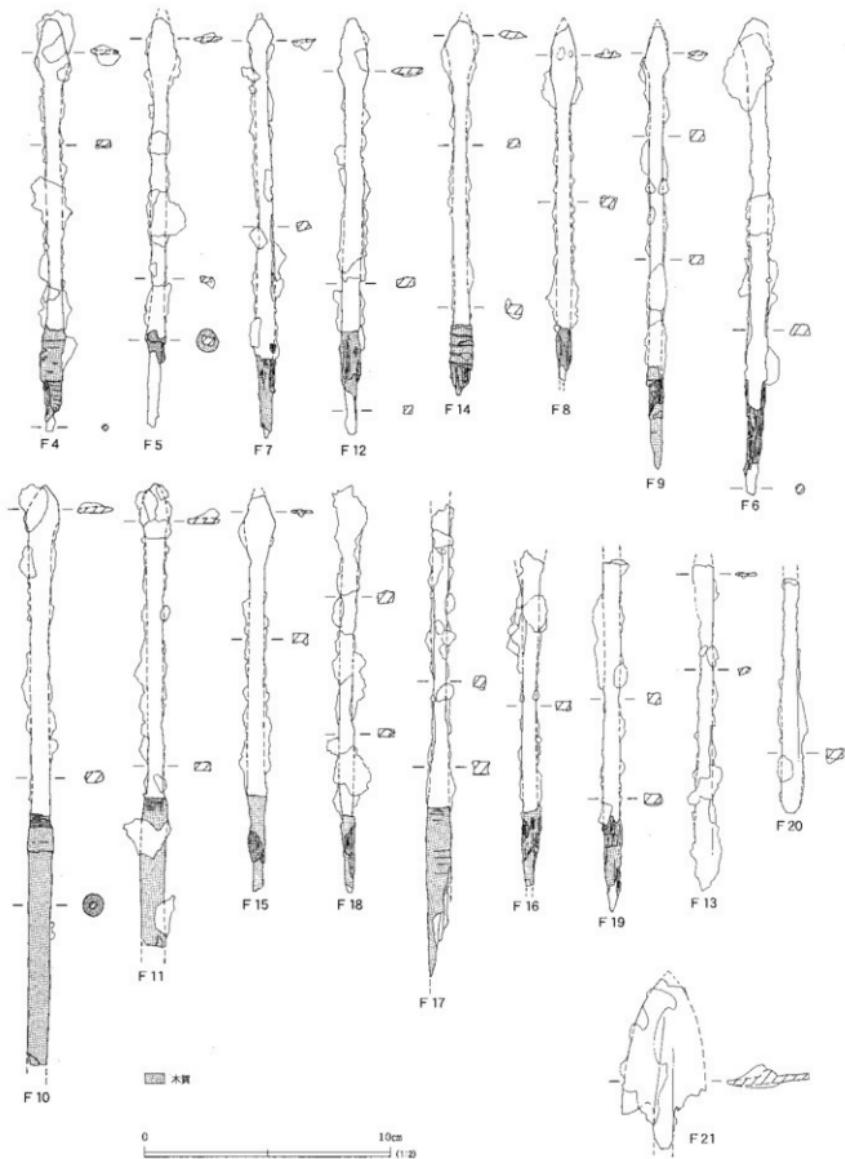
| 遺物No. | 全長 | 鐵 身 部 | | | | 頭部 | 頭 頭 部 | | 茎 | 備 考 |
|-------|-------|-------|-----|----|-------------|-----|-------|-----------|-----------|-------------|
| | | 平面形 | 断面形 | 逆剝 | 長さ×幅×厚さ | | 闊 | 長さ×幅×厚さ | 長さ×幅×厚さ | |
| F 4 | (168) | 小形柳葉形 | 平造 | 無 | (34)×14×1 | — | 長頭 | 不明 | 102×5×2 | 42×3×2 |
| F 5 | (167) | 小形柳葉形 | 平造 | 無 | (33)×10×1 | — | 長頭 | 直角 | 99×4×2.5 | 35×4×3 |
| F 6 | (165) | 小形柳葉形 | 平造 | 無 | (22)×(12)×1 | — | 長頭 | 直角 | 126×6×4 | 47×3×3 |
| F 7 | (171) | 小形柳葉形 | 平造 | 無 | (13)×9×1 | — | 長頭 | 不明 | 122×5×3 | 36×3×3 |
| F 8 | (145) | 小形柳葉形 | 平造 | 無 | (25)×10×2 | — | 長頭 | 不明 | 73×5×4 | 37×3×3 |
| F 9 | 180 | 小形柳葉形 | 平造 | 無 | (21)×8×2 | — | 長頭 | 直角 | 125×6×4 | 34×3×3 |
| F 10 | 237 | 小形柳葉形 | 平造 | 無 | (40)×15×3 | — | 長頭 | 不明 | 100×7×4 | 97×3×3 |
| F 11 | 189 | 小形柳葉形 | 平造 | 無 | (30)×12×2 | — | 長頭 | 不明 | 108×6×4 | 61×3×3 |
| F 12 | 170 | 小形柳葉形 | 平造 | 無 | 30×15×2 | — | 長頭 | 不明 | 97×6×3 | 43×3×3 |
| F 13 | (128) | 小形柳葉形 | 平造 | 無 | (9)×8×1 | — | 長頭 | 不明 | (119)×4×2 | — |
| F 14 | 152 | 小形柳葉形 | 平造 | 無 | 24×11×2 | — | 長頭 | 不明 | 100×4×3 | 28×3×2 |
| F 15 | (161) | 小形柳葉形 | 平造 | 無 | (29)×9×1 | — | 長頭 | 不明 | 90×7×3 | (43)×3×3 |
| F 16 | (137) | 不明 | — | — | — | — | 長頭 | 不明 | 93×6×4 | 34×3×3 |
| F 17 | (193) | 不明 | — | — | — | — | — | (124)×4×1 | (69)×4×3 | 頭部欠損 |
| F 18 | (167) | — | — | — | — | — | 不明 | —×6×4 | 41×3×2 | 刀部欠損 |
| F 19 | (142) | — | — | — | — | — | 不明 | (104)×4×4 | 38×3×3 | 刀部欠損 |
| F 20 | (96) | — | — | — | — | — | 不明 | 96×6×3 | — | 刀部・茎部欠損 |
| F 21 | (76) | 柳葉形 | 平造 | 頭缺 | (66)×34×3 | (5) | 短頭 | 不明 | 4×3×3 | — |
| F 22 | (99) | — | — | — | — | — | — | (70)×4×3 | 29×3×3 | 頭部欠損 姿部木質付着 |
| F 23 | (61) | — | — | — | — | — | — | (44)×5×3 | (17)×3×3 | 頭部欠損 姿部木質付着 |
| F 24 | (42) | — | — | — | — | — | — | (2)×5×3 | (40)×—×— | 頭部欠損 姿部木質付着 |



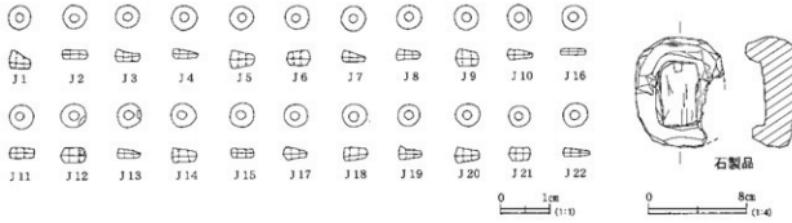
第13図 鉄刀・鉄剣・鉄槍

小玉（J 1～22） 1号埋葬施設底部出土。滑石製。濃緑黒色、濃淡の縞有り。よく磨かれて光沢を有す。中央に稜をつくり算盤玉状のもの（J 1～15・17～21）、稜のない臼状のもの（J 16・22）がある。

石製品 墳頂部中央の表土中から出土。凹型に彫り窪められる。一部欠損。平面形は隅丸長方形で、全長9.0cm、幅は推定で約7.0cmある。中央の凹部は、平滑で面をなし、内法で長軸5.0cm・短軸3.1cm・深さ1.3cmである。凹面の縁には、幅・深さともに1cm以内の溝が巡る。用途・時代とも不明。



第14図 鉄錆



第15図 小玉・石製品

垂飾品（第17図） 昭和55年の予備調査出土。淡緑色。

よく磨かれて光沢を有す。直径2.5~2.7cm、厚さ0.2cm。

中央に直径0.95cm、外縁寄りに直径0.2cmの両面穿孔有り。完形。繩文時代。

石庵丁（第17図） 昭和55年の予備調査出土。直径0.4cmの両面穿孔2孔有り。幅4.4cm、厚さ0.8cm。弥生時代。

小玉計測表

| 遺物名 | 直徑 | 長さ | 孔 径 | | 遺物名 | 直徑 | 長さ | 孔 径 | |
|------|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|
| | | | 上面 | 下面 | | | | 上面 | 下面 |
| J 1 | 5.0 | 3.3 | 1.7 | 1.9 | J 12 | 4.5 | 2.9 | 1.6 | 1.8 |
| J 2 | 5.0 | 1.9 | 1.4 | 1.8 | J 13 | 4.5 | 1.8 | 1.7 | 1.7 |
| J 3 | 4.8 | 2.4 | 1.5 | 1.8 | J 14 | 4.8 | 3.0 | 1.6 | 1.8 |
| J 4 | 4.8 | 1.8 | 1.6 | 1.9 | J 15 | 4.8 | 1.9 | 1.7 | 1.7 |
| J 5 | 4.9 | 3.4 | 1.7 | 1.9 | J 16 | 4.8 | 1.6 | 1.7 | 2.0 |
| J 6 | 4.9 | 3.0 | 1.7 | 1.9 | J 17 | 4.8 | 2.1 | 1.6 | 1.7 |
| J 7 | 5.0 | 2.1 | 1.6 | 1.8 | J 18 | 4.8 | 2.5 | 1.9 | 2.0 |
| J 8 | 6.0 | 2.0 | 1.5 | 1.7 | J 19 | 4.7 | 2.8 | 2.0 | 2.0 |
| J 9 | 4.9 | 3.2 | 1.7 | 2.2 | J 20 | 4.8 | 2.9 | 1.7 | 1.9 |
| J 10 | 5.1 | 2.0 | 1.8 | 1.9 | J 21 | 4.7 | 2.5 | 1.7 | 1.9 |
| J 11 | 6.0 | 2.2 | 1.5 | 1.9 | J 22 | 4.8 | 1.6 | 1.6 | 2.1 |

IV 鑑 定

奥小山8号墳3号主体部内出土の赤色物質について

岡山理科大学自然科学研究所

白 石 純

1はじめに

奥小山8号墳3号主体部内の床面から出土した赤色物質の由来について検討した。

現在までの知見から古墳などの埋葬主体内から出土する赤色物質には、酸化第2鉄（赤鉄鉱を主成分とするベンガラ）と硫化水銀（辰砂を主成分とする朱）が主に用いられていることが知られている。^{註2)}そこでこの分析では、これらの物質が含まれているかどうか検討した。

2 分析結果

分析試料は3号主体部内の床面の特に赤色が濃いところの4ヶ所から採取したものを分析した（第1表参照）。分析方法は、X線解析および蛍光X線分析方法で実施した。

X線回折では、赤色物質の鉱物成分について検討した。装置は理学電気工業（株）X線回折装置を使用し、X線管球：Cu(Kα)で印加電圧：40kV、印加電流：20mAで測定した。

この結果、第16図のX線回折図のように粘土鉱物のカオリナイトやクリストバライトと石英のピークがみられ

るのみで赤色の由来となる赤鉄鉱や辰砂は同定されなかった。

また、蛍光X線分析では赤色物質の主成分について検討した。装置はセイコーインスツルメンツ(株)卓上型蛍光X線分析計を用い、X線管球:Rh、検出器:Si半導体検出器で測定した。この結果第1表のように赤色の由来となる鉄が検出された。この他に珪素(Si)、アルミニウム(Al)、チタン(Ti)、カルシウム(Ca)、カリウム(K)、マンガン(Mn)などの元素が検出され、これらの元素は赤色物質以外の多量に混入している土砂に由来するものである。また、鉄に関しては赤鉄鉱が検出されなかったことから土砂に含まれているものと考えられる。では、この赤色物質は何に起因するものなのかであるが、この分析データから推測すると赤く見える物質は顔料の色ではなく赤色の粘土(鉄分に富むカオリナイト)の色であると推測される。

このように、3号主体部内出土の赤色物質は赤色顔料(ベンガラ、朱)ではなく赤色の粘土であると考えられる。

註 本田光子 「赤色顔料の資料化」『月刊考古学ジャーナル』11月号№438 1998

第1表 奥小山8号墳3号主体部内出土

赤色物質の分析値一覧表(%)

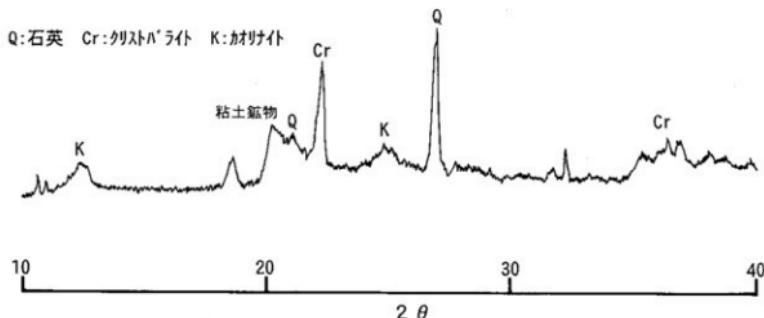
ただしZr,Sr,Rbはppm

| 試料番号 | 1 | 2 | 3 | 4 |
|------|-----------|-----------|--------|--------|
| 採取地点 | 西側小口部付近床面 | 東側小口部付近床面 | 壁部付近床面 | 足下付近床面 |
| Si | 45.84 | 46.11 | 51.53 | 50.09 |
| Al | 39.12 | 32.55 | 28.53 | 29.66 |
| Ti | 1.48 | 1.49 | 1.36 | 1.37 |
| Fe | 16.70 | 16.86 | 16.12 | 16.34 |
| Ca | 1.04 | 1.12 | 0.58 | 0.86 |
| K | 1.10 | 1.06 | 1.27 | 1.10 |
| Mn | 0.32 | 0.26 | 0.27 | 0.30 |
| Zr | 731 | 912 | 797 | 827 |
| Sr | 655 | 662 | 372 | 505 |
| Rb | — | 222 | 236 | — |

— 测定条件 —

X線管球 : Cu(K α)

電圧-電流 : 40kV-20mA



第16図 3号主体部床面出土赤色物質のX線回折図

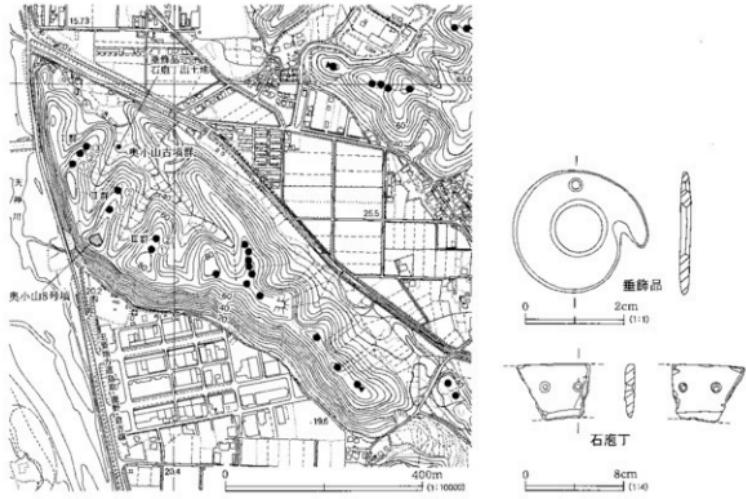
V ま と め

奥小山8号墳は、昭和55年に発掘調査された奥小山古墳群の西端、3つの丘陵の最高所に位置する古墳群の要的存在である。8号墳の墳丘規模・構造、棺形態は、他の7基の古墳と比較しても大差ないが、初葬時に古い棺形態である割竹形木棺を採用し、多量の鉄器を副葬するなどの隔差は認められる。以下、奥小山古墳群の現地説明会資料を基に、古墳群の概要と8号墳について若干の考察を行なうとする。

奥小山古墳群は、南東から北西に延びる約1kmの独立した丘陵尾根上に所在する。丘陵の西側は天神川に接し急峻になり、南側もまた急斜面になっているが、北側は比較的傾斜が緩やかで枝状に丘陵尾根が派生する。古墳の分布状況は、東西に並んで北へ延びる3つの丘陵上に、西側3基（I群）、中央2基（II群）、東側2基（III群）が連なる。7基は全て円墳で、規模は直径が最小で約13m、最大で約27mあり、いずれも地山成形して墳丘を造っている。主体部は、検出ができた4基（I群2・3号墳、II群1号墳、III群2号墳）では全て組合式の木棺であった。主体部の数は、II群2号墳が6基、他は全て2基検出され、複数基の主体部をもつ傾向がみられる。また、出土土器から古墳群の変遷を考えると、II群が5世紀後半～末、続いてI・III群が6世紀前葉～末にかけて築造される。尚、踏査によって丘陵南東側に古墳11基（内1基は前方後円墳）を確認したが、奥小山古墳群との関連は不明である。

奥小山8号墳について

墳丘と周溝 周溝を含めた規模が東西約18.0m・南北約14.0mのやや楕円形気味な円墳で、II群1号墳に次いで古墳群中2番目に大きい。古墳周辺の地形は、南側から西側にかけては、傾斜が急で橙褐色の地山面が露出している。このため、傾斜が緩やかな東側は周溝を深く掘り、削り取った土を旧地形の低い北東側に最も厚い部分で約0.55m盛土して墳丘を造っているが、南側から西側にかけてはほとんど見られない。墳丘は、自然地形を利用し西側を削り出した後、東側を中心で盛土成形していると考えられる。



第17図 奥小山古墳群周辺旧地形図・垂飾品・石廐丁

周溝は、墳丘の西側が急に落ちるため斜面をカットし、東側は丘陵尾根を切断するように半周する。東側中程の南北6mの範囲が膨らんでおり、古墳築造後、周溝内に埋葬施設を造る際に拡張したと推定される。

埋葬施設 主体部は、良好な遺存状態で墳丘上に3基（1・2号主体部が組合式の木棺墓、3号主体部が割竹形木棺墓）検出した。また、東側半分の周溝底で埋葬施設3基（木棺墓1基・土器棺墓1基・土壤墓1基）を検出した。3号主体部は、棺の主軸は東西方向で1号主体部に切られる。鉄刀1振・鉄劍1振・鉄槍1本・鐵鎌21本の豊富な鉄製武器が副葬されていた。3号主体部の割竹形木棺は、4世紀代の盛行期のものと比較すれば、副葬品こそ鉄製武器が多数出土したが、棺の長さは小規模で直葬とする点でいかにも稚拙である。おそらく割竹形木棺の最終段階のものと考えられる。

また、3号主体部棺底のほぼ中央から西寄りで土壤を検出した。これを仮に簡略化が進んだ排水坑とすれば、規模が小さい。可能性としては棺を埋葬する際の祭祀であると考える。こうした埋葬施設内の土壤は、当地域では沢べり遺跡（2次調査）²¹⁾で7基（1基は石蓋をする副葬品の埋納土壤、6基は不明）の埋葬施設で確認されている以外は類例がみられない。

周溝内の埋葬施設は、3基とも東側の周溝内に主軸を周溝に並行して造られている。1・3号埋葬施設は棺外に供獻土器を伴う。2号埋葬施設は合口式の土器棺墓で、蓋側の甕底部を穿孔し、高环の坏部で蓋をしている。副葬品は、1号埋葬施設の底から滑石製小玉が22個、2・3号埋葬施設からは出土しなかった。

供獻土器 原位置で出土した土器は、1号主体部の棺上で直口壺（1）、2号主体部の東小口側棺上で直口壺（6）・高环（10）、3号主体部東小口側棺上で高环（13・14）、1号埋葬施設西側で甕（2）、2号埋葬施設の棺に使用された甕（3・4）・高环（5）、3号埋葬施設北東側で須恵器坏身（18）・把手付甕（17）、北側周溝底で直口壺（16）がある。また、周溝内に転落した土器で、直口壺（7）・高环（11・12・15）は2号主体部、甕（8・9）は3号主体部の供獻土器と推定される。供獻土器の器種と個体数は、3号主体部で甕2個体・高环1種2個体、2号主体部で直口壺2個体・高环3種4個体が出土している。

3号主体部は、位置・供獻土器の時期からみて古墳築造の契機となった埋葬施設である。供獻土器の器種をみると3号主体部は甕と高环であるのに対し、2号主体部では直口壺と高环へと変化している。棺上供獻は古墳時代前期の伝統的な祭祀形態であるが、一古墳のなかでも比較的短期間に供獻土器の器種の変化がみられる。

時期 墳丘上に供獻された土器や、土器棺、周溝内の供獻土器、墳丘から周溝内に転落した土器の出土があり、ある程度時期的な把握が可能である。

3号主体部供獻土器の甕（9）は、体部倒卵形。口縁端部外面に面をもつ稜が明瞭。体部外面は丁寧なハケメ調整で内面は下半を縱方向、上半を横方向にヘラケズリし、出土土器のなかでも最も古い要素を備えている。形態・手法的特徴から服部III期²²⁾（TK208）に比定される。3号埋葬施設供獻土器の坏身（18）は、たち上がりが長くやや内傾し口縁端部は丸く終わる。底部内面直線的に仕上げナデを施し陶邑TK47併行期に比定される。出土土器には、土師器甕（19）や須恵器坏身（20・21）があり、TK217併行期のものもみられる。

以上、出土土器・遺構の切り合い関係から本古墳の埋葬施設の変遷は次のように考えられる。

①3号主体部（割竹形木棺墓、鉄製武器類が多量に副葬、甕と高环を棺上東（頭位）寄りに供獻）、②1号埋葬施設（土壤墓、3号主体部の頭位延長上に位置、玉の副葬、甕を棺外供獻）、③1号主体部（木棺墓、3号主体部と主軸同一、壺を棺上供獻）、④2号主体部（木棺墓、1号主体部を避けて北にずれる、直口壺と高环を棺上東寄りに供獻、周溝内にも直口壺供獻）、⑤2号埋葬施設（土器棺墓、墳裾に埋置）、⑥3号埋葬施設（木棺墓、周溝拡張、須恵器供獻）となる。

奥小山古墳群は、8号墳が尾根最高所に5世紀後半頃に築造されるのを契機に形成されたと推定される。8号

墳は他の古墳と比較すると、初葬時に古い棺形態である割竹形木棺を採用し、武器を多量に副葬するなど、盟主墳としての格差をみせる。そして、8号墳築造後、6世紀に入ると埋葬施設は全て組合式の木棺直葬となり、棺上供獻は純くようだが棺内に副葬品がみられなくなる傾向がある。

今回の調査では、ほぼ完存する古墳を調査し、一古墳においても埋葬施設の形態や副葬品、供獻土器についての変化を復元することができた。8号墳は、当地方における5世紀後半の古墳祭祀の一端を知ることができる好資料である。

註

- 1 水野正好・丹羽佑一『奥小山古墳群発掘調査概要』(現地説明会資料) 倉吉市教育委員会 1980
 - 2 朴 美子「埋葬施設底部における土坑・溝に関する若干の考察」『宇陀 北原古墳』 大宇陀町 奈良県立橿原考古学研究所 1988
 - 3 岡本智則「沢ベリ遺跡2次調査」『不入岡遺跡群発掘調査報告書』 倉吉市教育委員会 1996
 - 4 土井珠美「鳥取県下の状況」「弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について」第18回 埋蔵文化財研究会事務局 1986
 - 5 田辺昭三「須恵器大成」 角川書店 1981
- 参考文献
- 土井珠美『郊家平古墳群発掘調査報告書』 倉吉市教育委員会 1988
池淵俊一「鉄製武器に関する一考察」『古代文化研究 第1号』 島根県古代文化センター 1993
文献については鳥取県教育委員会文化課中原齊氏に御教示をいただいた。記して感謝します。



調査前全景

(東から)

調査区遠景（南西から）



調査後全景

(北から)



図版 2



1号・2号主体部検出状況（北東から）

1号（右）・2号（左）主体部（西から）



3号主体部検出状況（西から）



3号主体部棺内・外遺物出土状況（西から）



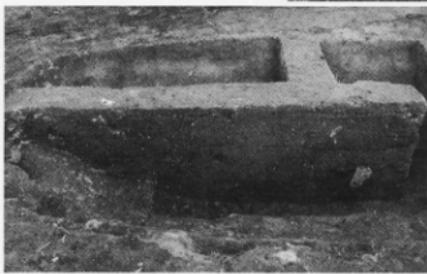
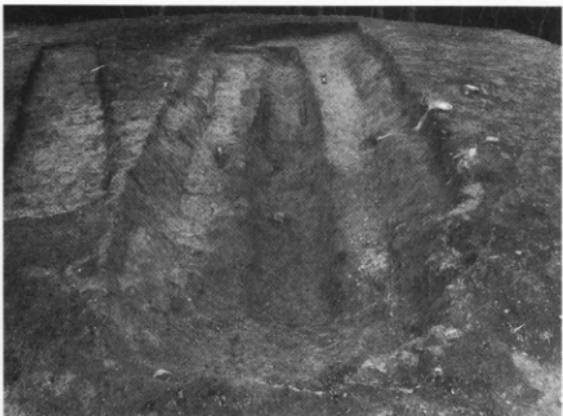
3号主体部木棺痕跡検出状況（西から）



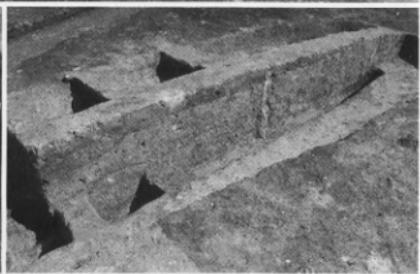
3号主体部・1号土壤完掘（西から）

3号主体部

(西から)



3号主体部西側断面（南から）



3号主体部東側断面（南西から）



3号主体部棺中央付近南北断面（西から）



3号主体部東小口板痕跡検出状況（北西から）

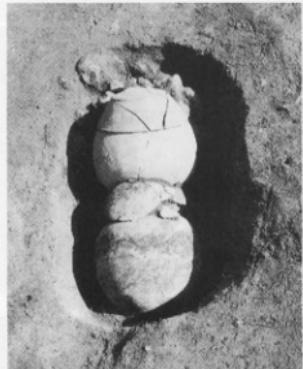
図版 4



1号埋葬施設（南から）



3号埋葬施設（南から）



2号埋葬施設埋土除去（北から）



2号埋葬施設土器棺蓋除去（南から）



2号埋葬施設土器棺取り上げ後（北から）



周構内土器出土状況（南東から）

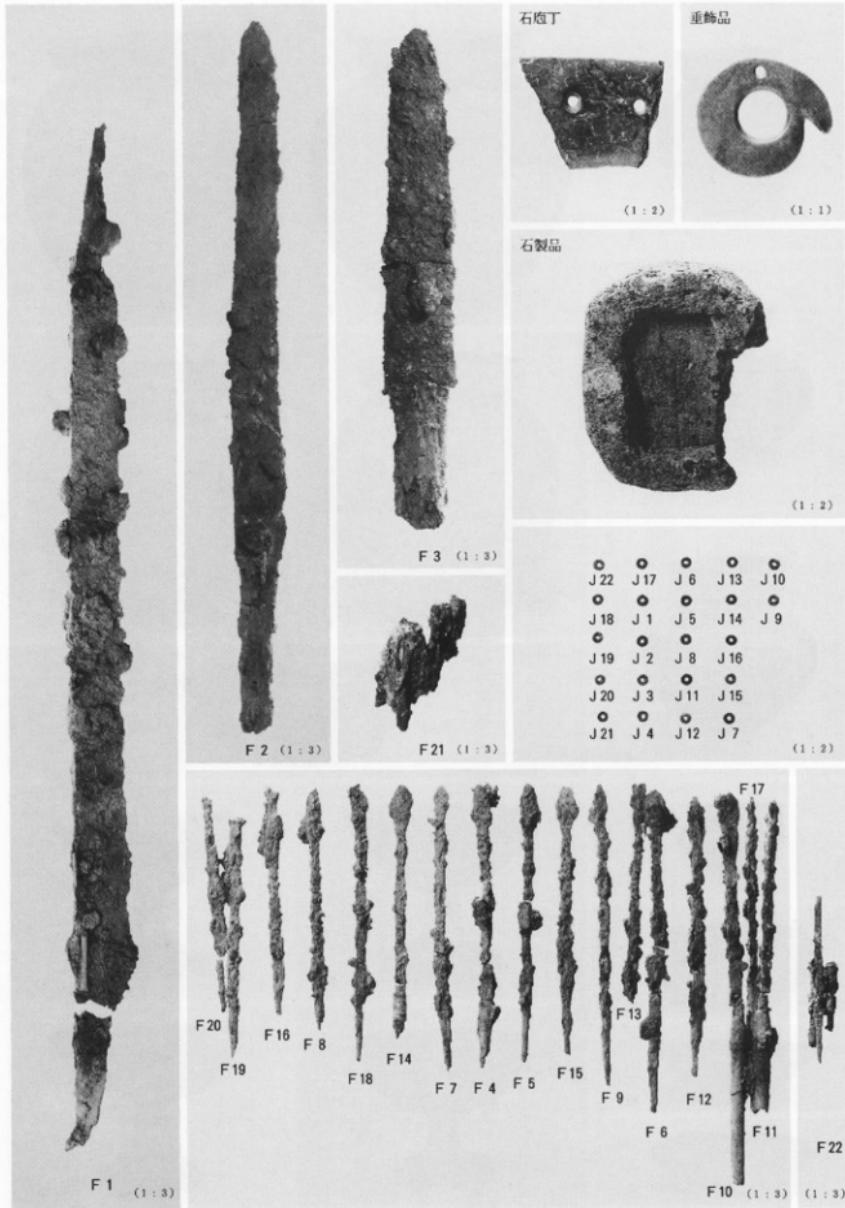


2号埋葬施設検出状況（南東から）



図版6

鉄製品・玉製品・石製品



報告書抄録

| | | | | | | | |
|--------|------------------------------------------|-----------------|---------------------------------|-------------|-----------------------|---------------------------------------|----------------------------------|
| 書名 | 奥小山8号墳発掘調査報告書 | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 倉吉市文化財調査報告書 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第101集 | | | | | | |
| 編著者名 | 岡本智則 | | | | | | |
| 編集機関 | 倉吉市教育委員会 | | | | | | |
| 所在地 | 〒682-8611 鳥取県倉吉市英町722番地 TEL.0858-22-4419 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦1999年3月19日 | | | | | | |
| 所収遺跡名 | 所 在 地 | コード 市町村：遺跡記号 | 北 緯 | 東 経 | 調査期間 | 調査面積 (m ²) | 調査原因 |
| 奥小山8号墳 | 倉吉市上余戸字奥小山 丸ヶ丘前、大船寺跡山 | 31203:4AKO | 35° 25' 47" | 135° 51' 7" | 1998.08.03~1998.10.19 | 290 | 主要地方道鳥取野倉吉 線道路改良工事に伴う事 前調査 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代：主な遺構 | 主な遺物 | | | 特記事項 | |
| 奥小山8号墳 | 古墳 | 古墳：古墳 1基 | 弥生土器・土師器・須恵器・鉄刀・鉄劍・ 鉄槍・鐵轡・小玉 | | | 割竹形木棺墓を主体とする5世紀後半の円墳。多 量の鉄製品を副葬する。 | |

奥小山8号墳発掘調査報告書

平成11年3月19日 印刷

平成11年3月19日 発行

編集 倉吉市教育委員会
発行 優成印刷
印刷
製本
